RIPPLE SAILING CLUB
NO. 101

月刊 1991・2・15
RIPPLE

（発行）　500円
リプル・セイリングクラブ
〒238-03
神奈川県横須賀市長井2－11－1
TEL 0468－57－1711

リプル・スキーツアー募集中です。

さーて！、恒例のリプルスキーツアーがいよいよ迫って参りました。雪不足だったゲレンデもたっぷりと雪をたたえ早くおいでよー！と呼んでいるかのようです。
現在２０名（内女性半分）ちょっとですがまだまだ募集中です！。
ビデオに宴会とアルコールの切れ間が無い、リプル・スキーツアー今年も出発進行！

日時　　3月1日（金）夜 ～ 3月3日（日）夜

場所　　菅平高原大松山スキー場

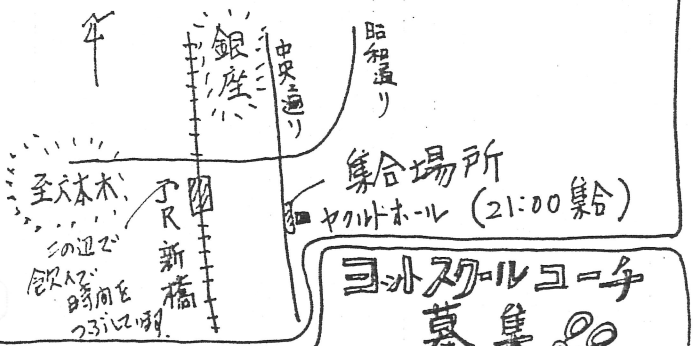
宿泊　　プチペンション ゾンタック
長野県小県郡真田町菅平
〒386-22 TEL. 0268-74-2321

費用　　一人 25，000円

集合場所　新橋ヤクルトホール前

集合時刻　21：00 （21：30出発）

注意　当日はリプルは全面休業です。



ヨットスクールコーチ募集

当リプルでは4月より土曜、日曜のみのヨットスクールの登録制コーチを募集致します。コーチ料は日当１０、０００円です。
これは、昨年来よりヤマハと神奈川県セーリングスポットでディンギーをもっともっと広げていこうという話合いが一致し、両者が共同で行うヨットスクールです。

現在ヤマハでは葉山マリーナで一般的なスクールを開講しておりますが、夏だヨットだ湘南だ！的なミーハーを相手に行っておりまして、卒業生は艤装はもちろん帆走なんて”飛んでも８分の世界”だそうです。現に葉山のスクールの卒業生を何度か教えたことが有りますが、何も出来ませんでした。
そこで、今年度よりスクールの内容を葉山校はエンジョイセーリングと名付け、いわば体験ヨットスクール的なヨットの基礎的な事を知ってもらう人達だけを教えるに留まり、一方我々セーリングスポットではレッスンセーリングと名付けた確実にハウツーをマスターしてもらうコースを受け持つのです。
ですから１日コースだけでは無く日帰り３回コースなんていうのも有り、とにかく艤装、出艇、着艇、解装まで一人で出来るところまで教えてしまおうと言うことです。

楽しみながらお金まで貰ってしまうコーチになろう！という人はリプルまで連絡下さい。コーチ心得等の会議を頃を見て開催致します。

お遊びクルーザーレースの実態!!

先月の事になるが我がリプル号はおとそ気分が真っ盛りの１月２日、ホームゲレンデ沖で行われた相模湾新春オープンヨットレースに参加をしてきました。
参加選手はリプル号の陰のオーナー阪上氏、ヨットは初めての土川氏、一人ではディンギーさえ艤装できない片山氏、そしてＳ氏と何とも頼りない選手団なのだ。
勝つことは鼻から諦め完走を目標に３１日より停泊していた三崎港を後にしたのである。
元旦の初日の出を台無しにした雨こそ止んだものの、スタート３０分前に小網代沖の赤燈台に着く頃には、またまた寒冷前線が近ずいていて西の空が真っ暗なのである。
風は冷たいＮ７－８ｍ／ｓとディンギーではかなりしんどいが、我がリプル号にとってはちょっと物足りない風速なのである。
微風だと走ってくれないが吹けば吹くほど快調な艇なのである。
そして、スタート時刻になる頃にはマイラー、ケブラーのセールの艇がポジション争いを始め出しているではないか。
６０数艇の参加艇なのにやけにスタートラインが短く、すでにライン上ではどなり合が始まっていて、とても近付る様子ではないので船団の後からくっついて行こうとなり、本部船遥か彼方に陣取りスタート時刻まで流すことにしたのであるが、スターボーとか、シモのルールを無視する艇の多いことに閉口したものである。
定刻通りスタート！
全体の２／３位の所に付けクローズで帆走指示書に記載の亀城礁沖の第一マークを目指した。
そしてレース終了後知ることになるが、ラインを切るとき本部艇のホワイトボードに5°　？？？Mと書いてあるのを横目に、またすっかり忘れ前線通過のまっただ中の冷たい雨と冷たい北風の吹きすさぶ中、順調に帆走していた。
途中他艇から”余り早く行かないでよー”と言われながら何艇か抜いたりもして、満年どんじりの汚名返上だ！と意気込んだ物である。
そして、スタート後しばらくして黄色のブイが見え、左手に見ながら回航し更に亀城礁沖を目指した。
マーク近くではボートでガンガン突っ込んで来る艇が何艇か有るが、スタボー艇に阻まれどんどんマークを回らず引き返して行くではないか！。お遊びレースなので引き返しているんだーなどと独断で判断し、更に亀城礁沖を目指すが行けども行けどもマークが見あたらない！。
一緒に走っていたなん艇かはまるで引き返すかのようにスピンを上げどんどん下って行くのである。
その時点ではまだ先ほどの黄色のブイが他艇と同じで、第一マークとは気が付いてはいなかったのである。
マークを回らない帆が余りにも多く、また亀城礁沖が脳裏から消えずどんどんと上って行ってしまったのである。
そして、人手不足の中でスピンを上げたのは他艇が遥か彼方の水平線に吸い込まれる時である。
第二ブイを回りフィニッシュラインを切る頃バンドフェットを抜いたものの成績はまたしてもさんたんたるものでした。
そしてホワイトボードの意味が分かったのはレース終了後のパーティーの時である。通称メッセージボードと呼びコース等が変わったときに１０分前に本部艇より知らせるもので、クルーザーレースでは常識との事である。
”クーーーーッ！！”今度はギャンバルゾー！！。
そして真っ暗闇の中、ピューピューと北風の吹く相模湾より我がホームポートに戻ったのは夜１０を回っていたのである。